

はじめに

この重点領域研究の全体的テーマは、地域研究の手法の確立を通して「世界と地域の共存」のパラダイムを求めることにおかれている。研究課題がこのように方向づけられた背景には、間違いなく、産業革命以降の科学技術・合理主義に基づく無限定の経済発展を礼賛している経済学者の「普遍論理」志向に対する強い批判が横たわっているようである。こういう問題意識の下に、「地域発展の固有論理」をさぐる我々の研究班が組織されている。

この班の代表者として筆者はこの1年間、「固有発展」という概念が喚起してくれる強い知的刺激の下に思考を重ねてきた。その思考の経過につれて書き続けたものが本報告である。

経済学者の多くが「普遍主義・論理」の市場経済学の下に、アジア諸国の経済発展といわれる現象を観察し続けていることは事実である。その典型は「新古典派」開発経済学であるが、この学派の市場経済理論はひとつの「理念」にまで形式化された市場理論である。この「理念」は決してその普遍性が「証明」されうるようなものではないが、現代世界中で「強力な力」として機能していることは間違いない。しかし、このような形式化された理念としての新古典派だけが我々の利用しうる市場経済論ではないのである。多くの経験主義的市場経済論も存在している事実を筆者は本報告で強調している。確かに「形式化された原理」に対比してみると、これら経験主義的市場経済論には多くのあいまいさがつきまってしまうことは否定できないところであるが、この経験の解釈につきまとう多義性こそが重要であるともいえるはずである。世界と地域の共存のパラダイムづくりに、もし経済学者として何らかの知的貢献ができるとしたら、それは経済学者と呼ばれる人間がこの「あいまいさ」に耐えうる知的思考力を身につける覚悟をした場合だけではなからうか。

1994年 3月

以上のような「はしがき」をつけて、筆者は重点領域研究の初年度におこなった研究の成果を、一応取りまとめ小冊子として印刷した。いま読み返してみると、この小冊子では、経済学が「地域研究への疎遠性を内在するディシプリン」の代表であるとする坪内良博教授の批判的問題提起に強く刺激されて、経済学にもいろいろと質の違う経済理論があるのだと、経済理論の中核におかれている市場経済理論にもその出自に応じた「地域性」があるのだということば

かりを論じていたようである。今回総括班の方から研究成果報告として広くサーキュレイトしてみてもというありがたい申し出を受けたのに際して、この「市場経済論の地域性」という論点を超えて、「経済発展の地域性」そのものを何とか明らかにしうる基礎作業だけは行っておきたいと思ひ、少しだけ努力してみたつもりである。これからも、地域間比較を自分なりに試みること、本報告でそのアウトラインを素描した「経済発展の地域性」に関する議論をより本格的に展開していく計画である。

それと同時に、この重点領域研究がもうすぐ後半の2ヶ年に入ろうとしている以上、小生もそろそろ経済学ではなくて「地域」「地域研究」という課題に本格的に取り組まねばと思っている。ある範囲にある社会のもつ「最も大きな特徴」を明らかにしていこうとする地域研究にとって、「地域」の地理的範囲にこだわる必要があることはほぼ自明であり、そこで他からは「わけられた」存在として「地域を括り出す」作業が死活の重要性を持つてくるはずだと考えることはまさに正統的である。しかし同時に、こういう作業は結果として「地域区分」に終わってしまうのではないかという批判もそれなりに有意味である。この立場に立つときは、本当に生きた地域像をつかまえるためには、地域の持つ個性的多様性を強調するだけでなく、その多様な地域の中にどのような「つなぐ論理」が埋め込まれているのか、そしてまたそういう関係の論理が地域をこえてどの様にひろがっているのかを見定めることの方がより知的に生産的な研究課題であるということになってくる。

さて、経済学とは、この後者の「つなぐ論理」を唯一の軸として世界のダイナミズムを読み解いていこうとしているとって間違いない。そういう経済学者の中では、冷戦後、大きな政治イデオロギーの役割が相対的に低下してしまい国際社会の中で経済競争だけが突出して「重要な問題」とされるようになってきた流れに対応して、「つなぐ」論理のひとつである自由競争経済ルールだけによって世界を律していくべき——つまり「くくって」みるべき——であるという主張が最も力を得たものとなっている。経済学者がこういう主張をする根拠となっている自由なる市場経済という「普遍論理」の理論的枠組みの下では、ユニバーサルな世界経済システムの中で利用しうる比較優位とは何かという点でしか、地域の個性が認識されていない。こういう経済学説には、本講義を通して筆者が主張してきたように、市場経済はその形式面では確かに普遍的に見えるが、その実際の運営・展開の面ではかなり地域性を帯びたものとなっているという、冷めた認識が全然見られていないことは間違いなさそうである。

どうも経済学を学ぶ立場からも、こういう「地域性」の具体的あり様を考慮に入れる視点から、ある範囲にある地域をひとつの地域単位として「くくってみる」必要がありそうである。そして、そういう「くくり」ができてはじめて「市場経済のもつ個性」を相互に認め合うような「共存を取り入れた多相的経済自由主義ルール」（村上泰亮『反古典的政治経済学』）の設計が可能になってくるはずである。経済学の側からも必要となってきたという視座に

立ってみると、高谷好一教授が提案されている「世界単位」論は大きな意味を持ってきそうである。高谷教授は、「単なる歴史地域としてではなく、21世紀の世界の理想的秩序のようなものを考えて」世界単位を描き出していきたいと表明されているが、この立場はまさに多相的な経済自由主義ルールを求めることの必要性に気がついている経済学者の立場とかなり重なり合うものとなっている。これから重点領域の後半2ヶ年間は、以上のような視角から小生なりに「地域研究」そのものの意味や方法の検討を進めていきたい。

1994年10月

原 洋之介